
天の川

青井ハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天の川

【Nコード】

N6034E

【作者名】

青井ハナ

【あらすじ】

七夕小説企画『星に願いを』参加作品 天文学者で星が大好きなお父さんと、それ以上にロマンチストで夢見がちなお母さん。七夕には家族全員で天の川を見に行くこと、それが我が家の大事なイベントだった。しかし、六年生になった私の思いは複雑で、今年は行かないと家族に告げてしまう。ところが、七夕の近づいたある夜にお母さんが弟の幸太にプレゼントした三角定規。それにはある秘密が隠されていて・・・。

前編

ささのは さくらさくら

ふんふんふんふん ゆれる

おほしきま

きくらきら

きんぎんすなご

幸太が歌っている。

大嫌いな算数の宿題をやっていた私の耳に、そのたどたどしい歌声はいやがおうにも入ってくる。

なにせ6畳が一間と台所があるだけの狭い家だ。

どこにいたって親子三人が何をしているか、何を喋っているかすぐにわかってしまう。

友達みんな「一人部屋」とやらを持っているらしい。

私も早く自分だけの部屋がほしいけど、そんなことは私にとっては夢のまた夢。

だいたいそんなわがママを言ってお母さんを困らせるほど私はもう子供じゃない。

「おねえちゃん、おねえちゃん。何やってるの？一緒にやろうよ」

幸太が私の横にべたんと座って覗き込んでくる。

手にはキラキラ光る銀色の折り紙を持っているが、指紋がべたべたついて鈍い銀色になってしまっている。

今年私と同じ小学校に入って来た幸太は、もうすぐ来る七夕のために折り紙でわっかだとか貝殻だとかを一生懸命に作っている。

まだ肝心の笹は我が家に登場していないが、そろそろお母さんが買ってくるのだろう。

幸太は七夕をすごく楽しみにしているから、待ちきれなくて飾りだ

け先に作っているようだ。

一緒に作ってあげてもいいけれど、この算数の宿題もやらないといけない。

だいたいさっきからちつとも進んでないし…。

「幸乃、ちよつとお鍋かき混ぜて」

頭の中で算数の宿題と笹飾り作りを天秤にかけて「うーん」と唸っている私の耳に、今度は台所からお母さんの呼び声が聞こえてきた。この狭い我が家では『聞こえなかった』は通用しない。

私はテーブル、いや、ちゃぶ台と言った方がいいかも、から動かず台所に向かって、

「今日はだめ！だってこの宿題やっていかないと明日ワニオに怒られるもん。」

そう叫ぶ。

ワニオというのはうちのクラスの担任のこと。

ワニみたいにごつくて怖い顔をしているから、みんな「ワニオ」って呼んでいる。

小学生のネーミングなんてみんなこんなものだ。

そんな私の主張を聞いていなかったのか聞かなかったことにしたのか、

「幸乃、早く早く！焦げちゃうー！！」

とマイペースな催促の呼び声。

「はあ…。」

私は溜め息をつく。

やっぱり一人部屋、ほしいなあ…。

などと悶々と考えている私の眉間には知らず知らずのうちにしわが寄っている。

「はあ。」

もう一度小さく溜め息をつく、横で幸太が心配そうに私の顔を覗き込んでいる。

「おねえちゃん、どうしたの？」

「何でもないよ。ちょっとテツガクしてただけ。」

首を傾げる幸太の頭をぽんと軽く叩くと、私は算数のドリルをパタンと閉じて台所へ行き、少しだけ底が焦げた肉じゃがをかき混ぜて弱火にする。

横を見るとお母さんは真剣な顔で、キャベツの千切りをすべく包丁と格闘している。

白のフリフリのエプロンを愛用していて、いい歳してかなり夢見がちなところがあるうちのお母さん。

最近では私の方がよっぽど大人。

そんな気がする。

さてさて、算数の宿題はもうお風呂の後にしよう…。

そうあきらめた私は、お母さんが揚げているトンカツの手伝いをする。

幸太は嬉しそうに「ごはん、ごはん！まだ？」とお母さんのお尻にぺったりと張り付いている。

これがいつもの川村家の光景だ。

「いただきます！す！！」

今夜の献立は母イチ押しの特カツとキャベツの千切り、そしてちよつとだけ焦げた肉じゃが。あとはご飯とおみそ汁。

今日はお肉があるぶんいつもの献立に比べて少々豪華だ。

幸太は喜んでトンカツにかじりついている。

その必死な姿は我が弟がなかなか可愛らしい。

幸太とは5歳年が離れているので何かと私が面倒を見なくてはいけないし、正直うつとうしいと思うこともある。

でも、焦げた肉じゃがをお箸でまどろっこしくつかみ上げながら、

「おねえちゃん、こげててもおいしいよお。」

とにこにこしている幸太はやっぱりかわいいな、と思う。

どれどれ、と私も焦げた肉じゃがを口に入れてみる。

うん、こげた肉じゃがも意外と香ばしくて美味しいじゃない。

なんて生意気を言いながら幸太と笑い合っていると、ふいにお母さんが私に聞いてきた。

「幸乃。天の川、本当に見に行かないの？」

私の胸がドキンと小さく飛び跳ねる。

私は口いっぱいにほおばった肉じゃがを一生懸命飲み込むと、何でもないふうを装いつつさらっと答える。

「うん。行かない。だって7日は全校集会だし、体育もあるし。」

「ふうん、そっか。そうだね。じゃあ仕方ないね。」

「うん、ごめん…。」

今年はお姉ちゃんが行けないからお家で七夕パーティーしようか、と幸太に話しかけるお母さんの顔はやっぱ寂しそうだ。

胸がズキンと痛んだ。

でも、でも、仕方ない。

だって今年は学校を休むわけに行かないし、いつまでも家族行事だけを大切にしていくなけにいかないんだから。

私は自分の決断を頭の中から慌てて消すように、ご飯を必死にかき込んだ。

三年前にお父さんが死んだ。

天文学者だったお父さんは、空と星が大好きなロマンチストだった。大学の星空研究会とやらでお父さんとお母さんは運命的に出会って、ダイレンアイをして結婚したらしい。

お母さんもお父さんに負けず劣らずのロマンチストだから、我が家はいつも素敵なことや素敵なイベントで溢れていた。

その一つが、毎年七夕の夜には必ず天の川を家族みんなで見に行くことだ。

七夕の日が平日の時は、私も幸太も学校と幼稚園をお休みした。

もちろん理由は誰にも内緒で『風邪』、ということになっている。

天気が悪くて星が見えないことも多い七夕の夜だけれど、川村家は天の川を求めて見える所まで出かける。

ある年は奥多摩、ある年は長野まで。

私は小さくて覚えていないけれど、東北の湖まで行ったこともあったらしい。

みんなで寝袋にすっぽりと入って寝ころぶ。
そして、夏の夜空にかかる天の川を見ながら、

ささのは さ〜らさ〜

と歌った。

お父さんは天の川にかかる夏の大三角形を指さして、

「あの星、わし座のアルタイルがお父さんだ。こと座のベガ、あの星がお母さん。さて、幸乃はどれかな？」

と私に聞く。

私は元気よく、

「デネブーー！」

と答えて、はくちよう座の中で一番光り輝く大きな星を指さす。

お父さんは私の頭をわしわしと撫でると、「良く出来ました」と褒めてくれる。

それが無性に嬉しくてくすぐったかった。

幼い私にはなんでお母さんの方が私より小さなこと座で、私のはくちよう座なのかわからなかったが、とにかく家族みんなで見る夏の夜空が大好きだった。

幸太が生まれてからは、はくちよう座の一番おしりの小さく光る星を幸太だ、とお父さんは言った。

三つの星の三角形の中に囲まれて、はくちよう座のおしりで小さく光る星。

三人で大事に守っていかないといけないよ、と言うお父さんの言葉は私の胸にすうっと入ってきた。

私は隣に転がっている幸太を見ると、にっこりと笑う。

幸太も笑う。

お父さんもお母さんも笑う。

そしてみんなで目を閉じて願いごとをする。

― 家族四人、いつまでも仲良く楽しくいられますように。―

その願いごとは叶わず、三年前の冬にお父さんは肺炎をこじらせて死んでしまった。

風邪を引いて今回はちょっと大変そうだな、そうなふうに思っていたら急に入院することになり、その時は私もお母さんも驚いた。

でもまさか死んでしまうなんて思わなかったから、私はお父さんに何にもしてあげられなかった。

病院にお見舞いに行つては、調子に乗ってペラペラと一方的に話続けた。

学校でのこと、幸太のこと、好きなアニメのこと。話すことは尽きなかった。

そして、たまに星の話をせがんだ。

「いつ帰ってくるの？」とはしゃぎながら聞くと、お父さんは優しい目をして私に言った。

「幸乃。パパがいない間、お母さんと幸太と仲良くするんだぞ。」

それは私の質問の答えにはなっていなかったけれど、私は「うん」と答える。

だつてお父さんの口調はなぜかとても真剣で、まるで私に諭すようだったから。

その日の夜。

お父さんは容体が急変して、私たち三人を残してあっけなく死んでしまった。

私が小学三年生、幸太が幼稚園に入った年の冬だった。

その翌年の七夕も、去年の七夕も、お母さんと幸太と三人で天の川

を見に行った。

でも今年はいかない、私はそう決めた。

お父さんとの思い出のあるこの行事ももう卒業することにした。
というか、卒業しないといけない。

そんな焦りのような気持ちが何故だか芽生えていた。

本当に、ナオやノンちゃんと一緒に七夕集会で司会をすることにな
っているし、いつまでも家族で天の川を見に行くために学校を休む
わけにいかないし。

みんなのことはもちろん大好きだけど、私はもうそんなに子供じゃ
ないんだ。

だから、お母さん、幸太、ごめんね。

そして、お父さん。

ごめんね。

次の日。

私が学校から帰ってくると幸太は家にいなかった。

ランドセルと帽子があるから、一度帰ってきてからケンちゃん達と
でも遊びに行ったのだろう。

お母さんはまだお仕事で帰って来ていない。

よし、今のうちにナオとの交換日記を書いちゃおう。

私はテーブルの上に交換日記と色とりどりのペンをばらばらと並べ
て、今日の学校でのちょっとした事件だのワニオのことだのを書き
始めた。

どれも取るに足らないような下らない内容だが、私たちにとっては

貴重な情報交換と笑いのネタなのだ。

書くのに熱中していたために時間を忘れていた私は、ふと時計を見るともう六時を回っていた。

外はまだ明るいが、幸太が帰ってこないことに少し不安を感じた。

遅いなあ。

どうしたんだろう。

携帯がピカピカ光っていることに気がついて、ピンクの機体をパカッと開くと新着メールが一件あった。

お母さんからだ。

『幸乃ごめん！ママの交替の人が遅れるみたいで、もう少しかかります。終わったらすぐ連絡するから！ご飯だけ炊いといて〜』

こういうことはたまにあるから別に驚かない。

お母さんはお父さんが死んじゃってから、お仕事をたくさんするようになった。

夢見がちで乙女みたいなお母さんがちゃんとお仕事出来るのかなあ、と心配したけれど、結構頑張ってるみたい。

お母さんは連絡のためと、護身用という理由で携帯電話を買ってくれた。

でも、登録はお母さんと緊急時のためのおばあちゃんの家だけ。いつもお友達と話す必要があるなら、家の電話にかければいいですよ。

そう言って私の携帯を堂々とチェックするのだ。

中学生になったら友達の番号もたくさん登録してやるんだから！

と私が密かに企んでいることはまだ内緒だ。

お米を研ぎ終わって時計を見るともう六時半を回っていた。
まだ幸太は帰って来ない。

いつもならお母さんが遅くたって、ご飯の支度をしたり宿題をやったりして全然平気だ。

でも、今日は幸太がいない。
そのことが私を無性に心もとなくさせた。

どうしたんだろう。

いくら何でもちよつと遅い。

だいたい幸太はまだ一年生だ。

友達だってみんな六時には家に帰るし、今までこんな時間まで帰って来なかったことは一度だってなかった。

遠くで救急車のサイレンの音が聞こえた。

私は一瞬時が止まったように固まった。

サイレンの音はだんだん小さくなり、遠くに消えていった。

幸太…。

まさか川に落ちたりしてないよね？

知らない人に連れて行かれたりしてないよね？

まさか車にはねられたり…。

背中がぞわりとして小さく身震いした。

胸が急に早鐘のようにドキドキ鳴り出して、頭の中が悪い考えでいっぱいになった。

手にはべつとりと汗をかき始めて、もう何も手に付かなくなっていた。

私は一人で台所に立ち尽くしていた。

さっきまで何であんなに普通に日記を書いたりお米を研いだり出来ていたのか、今となってはもう思い出せないほど気が動転していた。周りの空気が急に薄くなった気がして、息がしづらくなって胸が苦しくなった。

どうしよう。

どうしよう！

頭の中を悪いことがぐるぐると回り始め、私はいてもたってもいられなくなり携帯をつかんだ。

お母さん！！

リダイヤルのお母さんの番号にかけようとするが、指が震えてうまく押すことが出来ない。

やっとかけることが出来たが、コール音が虚しく鳴り続けるだけでお母さんの声はいつまでたっても聞こえない。

無機質な音声が留守番電話サービスに接続することを伝えると、私ほもどかしい思いで電話を切った。

どうしよう！

焦った私の頭に次に浮かんだのは、おばあちゃんの顔だった。

おばあちゃん！

そう思った私はとっさにおばあちゃんに電話をかけ始めたのだが、コール音が1回鳴ったところで慌てて電話を切った。

だって、ここから二時間もかかる所に住んでいるおばあちゃんに電

話をかけたところで、心配と迷惑をかけるだけだ。
やっぱりだめだ。私が何とかしなくちゃ。

私は携帯を握り締めたまま深呼吸をした。

少しだけ気持ちが悪く落ちていて、さっきよりも少しだけ息がしやすくなった気がした。

よし、探しに行こう。

やや冷静さを取り戻した私は、そう決心した。

お母さんが心配するといけないからちゃんとメールを打った。

『幸太がまだ帰って来ないから探しに行きます。お仕事終わったら連絡下さい。』

ボタンをうまく操作することが出来ず、いつもより時間がかかってしまった。

お気に入りのピンクの機体が汗でベタベタになっていたが、今の私にはどうでも良かった。

私は携帯だけを握り締めると、急いで玄関に向かった。

慌てていたのでお母さんのつかかけを履いて外に飛び出した。

しかし、サイズも合わなければ履きなれてもいないため、歩きづらくて危うく階段で転びそうになってしまった。

ああ、もうまどろっこしい！

でもこんなじゃ幸太を探す前に私が事故にあっちゃう。

そう思った私は、はやる気持ちを抑えて階段を上がると玄関に戻った。

カギもかけていなかったことにその時気づいた。

早く幸太を探しに行かなくちゃ！

自分に苛々しながら、私はサンダルを脱ぎすててスニーカーを履こうと玄関にしゃがみこんだ。

でも焦り過ぎていて靴ひもがうまく結べない。

とても気に入ってお母さんに頼み込んで買ってもらったプーマの白とピンクのスニーカーだけど、こんな時はなんでもっと履きやすくないのかとイライラした。

あとちょっと…。

とその時、あることに気がついた。

靴がある。

幸太の靴が玄関に二つある。

幸太のお気に入りのキャラクターの靴と、私とお揃いのプーマのスニーカー。

他には幸太の靴はないはずだ。

なんで？

気が動転している私は冷静に考えられず、一瞬頭の中がパニックになる。

その時、手に握り締めていた携帯が鳴り出した。

お母さんだ、そう思った瞬間着信画面も見ずに通話ボタンを押すと、

「お母さん！幸太が帰って来ないから探しに行こうとしたら、玄関に靴あるの！幸太の靴、二つともあるの！」

といきなり大声でわめいた。

お母さんはぜいぜい息を切らしながらわめく私に、

「幸乃、大丈夫よ。お母さんもつすぐ家に着くからね。靴があるなら幸太はきつと家の中にいるのよ。探してみて！」
と言った。

私はお母さんの声を聞いて、自分でもびっくりするくらい息が落ちていてくるのを感じた。

「わかった!!」

とだけ答えて、携帯を切る。

そうか、幸太は家の中…。

ランドセルも帽子も靴もあるのだ。
家の中にいるに決まっていたのだ。
何でそんな当たり前のことがわからなくなってしまったのだろう。

私は急速に姉らしさを取り戻すと、狭い家の中をぐるりと見渡した。
隠れるところなんてほとんどない。

トイレ。

お風呂場。

そつと開けてみたが幸太はいない。

他に隠れるところなんて…。

そう思つてまた不安になり始めた私は、狭い部屋を見渡して妙な違和感を覚えた。

なんだ、あれ？

黒い配線コードが一本、押し入れの中から出ている。

いや、正確には部屋の電源にプラグがささっていて、そこから押し入れの中にコードが入っていつている。

いつもそうだったっけ？

いや、あんなのいつもはない！

私は押し入れをおそろおそろ開けた。

そこには、たたまれた布団の上に小さく丸まってすやすやと寝ている幸太がいた。

頭の横、押し入れの奥の方に卓上ライトが転がっていて、あの黒い配線コードが伸びている。

私の勉強机のライトだ。

幸太の回りには絵の具だろうか、何かのチューブが何個か転がっている。

幸太の姿を認めた私は、張り詰めていたものから一気に解き放たれた。

いた…。

そう安堵した瞬間、私の中にむかむかとした感情が湧き上がってきて、顔がカーツと熱くなり出した。

私の心配なんて何一つ知らない顔ですやすやと寝ている幸太の体を大きく揺さぶった。

「幸太！幸太っ！！」

ヒステリックな私の声と急に体を揺さぶられたことに驚いた幸太が、ビクツとして目を覚ました。

「おねえちゃん？あれ、ボク寝ちゃってた。」

私は何だか急に涙が目にくわーっと込み上げてきて、頭の中に幸太に言っただけの言葉がマグマのように噴き出してきた。

多分その時の私はものすごい形相をしてたんだと思う。

幸太が私の顔を見て泣き出した。

それを見た私は更に逆上した。

感情のケツカイだ。

「何であんたが泣いてんのよ！私が、私がどれだけ心配したと思つてんのよ！車にひかれたかと思つて外に探しに行こうとしたら靴はあるし、お母さんはいないし、電話もつながらないし。なのに何でこんなところで寝てんのよ！！意味わかんないっ！」

幸太はもう私から矢のように降り注ぐ怒声にびっくりしてわんわん泣き叫んでいる。

私ももうわけがわからないくらいに泣きじゃくりながら、押し入れの幸太に向かつてさらに声を張り上げ続けた。

いつの間にかお母さんが帰って来ていて、私の後ろから、

「幸乃、もう止めなさいっ。わかったから！」

と止めに入つたが、私の勢いは止まらなかった。

しゃくりあげながら、なおも幸太に向かつて叫ぼうとした私の頭の上に、突然冷たいものがばしゃーと落ちて来た。

一瞬にして私の叫びは止まり、思考がショートした。

気付くと私はずぶ濡れになっていた。

足元の畳は水浸しになり、髪の毛の先からはぼたぼたと水が滴り落ちていく。

何が起つたがわからず茫然としている私に、お母さんが言った。

「いい加減にしなさい。これ以上言ったら、幸乃も幸太も傷つくから。」

我に返つた私は、押し入れの中で泣きじゃくっている幸太を見た。

幸太は小さなふつくらとした顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにして、ほつぺたを真っ赤にして、

「おねえちゃん、ごめ、ごめなさいっ。ごめなさいいっ」と泣いていた。

私は我に帰った。自分のしたことが急に恥ずかしくなった。

お母さんが流しの水だらいを持って立っていた。

その空になった水だらいを何も言わずに下に置くと、押し入れから幸太を抱き上げて下に優しく降ろした。

幸太はもう足に力が入らなくてへたへたと畳に座り込んでしまった。それを見た私も、急に力が抜けてへたへたと座り込んでしまった。

お母さんは幸太と私、二人を抱き寄せると、

「よしよし、二人ともこわかったね。もう大丈夫だからね。よしよし。」

と優しく頭を撫でた。

私はもう本当に体中の力が抜けて、心の底から安心してしまった。

幸太も泣きやんで目をつぶっている。

その真っ赤になったほっぺたと腫れぼったいまぶたを見ると、私は胸がぎゅゅと締めつけられた。

幸太、ごめんね。ごめんね。

幸太の頭をなでると、幸太は腫れぼったくなった目を開けてうるうるしながら私を見た。

その顔を見てまた泣きそうになる私に、お母さんが言った。

「さあさあ、いつまでもそんなところでいたら風邪ひいちゃうし、幸太も目が腫れて幼稚園に行けなくなっちゃうよ！久しぶりにみんなと一緒に風呂に入ろっか！」

私も幸太も「うんっ！」と元気に返事した。

その声が同時だったので、お母さんがすっごく楽しそうに笑った。

「三人でつかると、やっぱりちょっと狭いねえ。」

そう言ったのはお母さん。

「そうだね。」

と答えたのは私だけで、幸太は嬉しそうにお母さんと私の間に小さくなって座ってお決まりの鼻歌を歌っている。

ささのは さゝらさゝら

ちよつと鼻にかかった子供らしい歌声が、川村家のお風呂場に響く。私は目を閉じて、

「はあ。」

と大きく息を吐いた。

今日は大変な一日だった。

本当はほんの一時間ほどの出来事だったのだが、私にとっては一日中だったように感じられた。

でも、温かいお風呂に家族三人でつかっていると、あんなに大変だった出来事もまるで氷をお湯につけたみたいにみるみる溶けていくようだった。

ぐうつぐうつ

誰かのお腹が鳴った。

「あれ、幸太。安心したらお腹空いちやったかな？」

とお母さんが幸太に聞くと、

ぐうつぐうつ

今度は私のお腹が鳴った。

それが何だかおかしくておかしくて、三人で大笑いした。

お風呂から上がると、お母さんが、

「今日は手抜きでこめんね。」

と、お鍋にお湯を沸かしてインスタントのカレーを温めている。

慌てていてお惣菜を買う余裕もなかったのだらう。

私は今更ながら、自分の慌てぶりと幸太をヒステリックに怒鳴ったことを情けなく思った。

しかも、お米を研いだ後炊飯のスイッチをすっかり押し忘れていた私の失態で、腹ペコな三人はまだしばらくご飯にありつけないことになった。

本当に今日はトホホな一日だった。

だけど、お母さんは乙女で夢見がちで私の方が大人なんじゃないかなんて思っていたけれど、それは全然違っていたんだ。

やっぱりお母さんはお母さんで、ちゃんと大人で、自分を大人だと思っていた私の方がよっぽど子供だったんだ。

私も幸太も、まだまだお母さんに守られているんだ。

そのことに気づけただけでも、今日はもしかすると素敵な一日だったのかも知れない。

ね、お父さんもそう思うでしょ？

私は仏壇の上のお父さんの写真にそつと不器用にウィンクした。

写真のお父さんがちよつとだけ笑った、そんな気がした。

実はこの夜。

お母さんが幸太にプレゼントしたあるものにはとんでもない秘密が隠されていたのだが、私と幸太がそのことに気が付くのは数日後だった。

前編（後書き）

七夕企画に参加させて頂いております。

七夕のロマンチックさをうまく描ききれるか心配ですが、後編も頑張りますので、

最後までお付き合い頂けると嬉しいです。

宜しくお願いします！！

後編

その三角定規の謎に気がついたのは、七夕が明日にせまった七月六日の日曜日の夜だった。

ついに昨日、我が川村家にも笹が登場した。

私の背丈よりもちよつと大きいくらいの笹なのだが、幸太が折り紙で作ったたくさんの飾りをこれでもかと身にまとい、大きな割にかなり賑やかないでたちになっている。

あとは、短冊に三人の願い事を書いてぶらさげれば完成だ。

今年の願い事は何にしようかなあ。

またしても進まない算数の宿題を広げて、ぼんやりと考えていた私の背中に、

「おねえちゃん、ねえねえ。」

と、小さなかたまりがどしんとぶつかってきた。

小学一年生とは言え、その重みと衝撃に私は思わず目を白黒させた。何とか背中から幸太を引っぺがすと、

「なに、どうしたの？」

と振り向いた私の目の前に、白い三角定規がにゅつと突き付けられた。

私は突然のことに驚いて声が出なかったのだが、すぐにその近すぎる三角定規に焦点を合わせようと努力してみた。

しかし、やっぱり近すぎてどうにもピントが合わない。

私は寄り目になりながら、

「何？どうしたの？？」

と聞いた。

すると幸太は、

「裏になんか書いてあるの。ぼく、ちょっとしか読めない。」
と言った。

「え？」

私はその白い三角定規を小さくて柔らかい幸太の手からそつと取ると、裏返してみた。

そこには少し小さめのきれいな字で何かメッセージのようなものが書いてあった。

私はその字を見た瞬間はつと息をのんだ。

「うそ……。どういうこと？」

私はあまりの驚きにすぐには声が出なかった。

それは忘れもしない、お父さんの字だったのだ。

三日前、私がヒステリックに叫び幸太がわんわん泣いたあの日の夜。

ようやく炊けたご飯を三人で食べていると、ふとお母さんがこんなことを言った。

「そうだ。幸太にプレゼントをあげようかしらね。」

私はお母さんの突然のその発言に、正直「？」という感じだったし、何で幸太だけとつまらなく思う気持ちもあった。

幸太は相変わらず無邪気に、

「プレゼント、プレゼント！何？」

とはしゃいでいる。

その笑顔を見ていると、さっき自分が泣かせてしまった引け目もあり、

「幸太、良かったね！」

と、私はつまらなく思う気持ちをしまい、お姉ちゃんらしく声をかけた。

幸太はそわそわしながら、「うん！」と叫んだ。

お母さんは筆筒の一番上の引出しを開けると、ごそごそと何かを取り出した。

そこは私も開けないし、幸太はまだ手が届かない引き出した。

一体どんなプレゼントが出てくるのかと期待に胸を膨らませる幸太と、それを見守る私。

二人の視線がお母さんの取り出した「それ」に注がれた。

しかし、それは思ったよりもずっとずっと小さくて、薄べったかった。

一体なんだろう？

興味津々の私と幸太に、お母さんはそれを手渡した。

幸太の小さな手に預けられたそれは、三角定規とコンパスのセットだった。

三角定規の入った不透明なビニールケースの上に、プラスチックケースに入ったコンパスを乗せて、えんじ色の上品なりボンで結んでいる。

でも、プレゼントっぽいのはリボンだけだった。

何の変哲もない三角定規とコンパスだ。

一つ変わっていることは、その三角定規が白いということ。

私の持っている三角定規は透明だし、友達もみんな透明のものを使っている。

こんな色の三角定規、あつたんだ。

幸太は無邪気に、

「あ、この三角の、ぼく知ってる！おねえちゃんが持ってるやつだよ！」

と元気な声で叫ぶ。

私は、

「なんだあ、三角定規かあ。つまんないの。」

とは言ったものの、本当は肩の力が抜けたというか、ちょっぴりほつとした気分だった。

私には面白くも何ともないプレゼントだったが、幸太はなぜか大喜びしている。

でも、幸太はまだ一年生だ。

三角定規とコンパスを使うにはまだ早い。

なのに、お母さんはなんで今これを幸太にあげたのだろう。

しかも誕生日でも何でもない今日、突然。

私の頭はハテナでいっぱいだ。

当の幸太は、三角定規とコンパスを何に使うのかもわからないくせに、

「おねえちゃんと一緒。一緒。」

とにこにこしてはしゃいでいる。

全くのんきなものだ。

「幸太。その三角の定規とコンパスは先が尖っていても危ないから、振り回したり人に向けたりしちゃ絶対にだめよ。」
お母さんが使用上の注意をする。

幸太は神妙な表情でこくこくと頷いている。

その妙に真面目な顔がおかしくて、私は思わず噴き出してしまった。

結局その日はリボンを解くことなく、三角定規とコンパスはそのまま幸太のお道具箱の中にしまわれた。

そして、その三角定規が私の目の前に突き出されたのはつい先ほどの出来事。

裏には何と、懐かしい懐かしいお父さんの字で何かメッセージのようなものが書き記されている。

簡単だけど漢字も少しだけ混じっている。

幸太がまだ読めないわけだ。

私はドキドキした。

予期せぬ何か秘密めいた気配を感じて、胸がわくわくと弾んだ。

幸太が、

「おねえちゃん、なんてかいてあるの？よんでよんでえ！」

と大きな声で騒ぎ出したので、私は焦った。

まだお母さんにはこのお父さんからの秘密メッセージのことは、何故だかもう少しだけ内緒にしておきたかった。

ちらつと台所に目をやると、お母さんは夕飯の仕度に忙しそうで、

私と幸太のやり取りには気が付いていないみたいだった。

私はホッと小さく息をつく、そのメッセージを読み始めた。

―― 幸太の三角定規と幸乃のペンダント。

ふたつの力が押入れのすみで合わさったとき、あらたな宝ものが見つかるだろう。

パ

パより、愛をこめて。――

何これ……。――

これはメッセージというよりまるでなぞかけだ。

お父さんからの温かいメッセージのようなものを期待していた私は、風船のように膨らんだ胸がしゅんとしぼんでいくのを感じた。

一体これはどういう意味なの？

ふたつの力？押入れ？？

この謎を私は解けるのだろうか。

解けなかったら、お父さんからの時を越えたこのメッセージは何の意味もなさなくなってしまう。

私は何だか緊張してきて、さっきとは違う感じで胸がドキドキし始めた。

「なあに、なあに！」

とさっきから私のTシャツの裾を引っ張りながらしきりに説明を求める幸太に、私は小声で言った。

「お父さんからのなぞなぞだったよ。どういう意味かなあ？」

幸太はどんぐりのような目を真ん丸に見開いて、きゃーと嬉しそうに手足をバタバタさせた。

はしゃぐ幸太に、私は神妙な顔で説明する。

「幸太のこのじょうぎと、おねえちゃんのペンダント。このふたつの力があわさると、宝ものが見つかるんだって。」

「えーっ、だからもの！！なに？」

幸太はすっかりはしゃいでしまっているので、声がどんどん大きくなっている。

私は慌ててシートと人指しゆびを口に当てた。

お母さんが、

「どうしたのー？」

と台所から声をかけてくる。

「何でもない！幸太となぞなぞして遊んでただけ！」

私は手をぶんぶんと振ると、何でもないのジエスチャーをしてごまかした。

お母さんは「ふうん、そ。」とだけ言うと、また夕飯の準備に集中し始めた。

私は胸をなで降ろすと、お父さんからのメッセージの謎について考えた。

幸太が、

「おねえちゃんのぺんだんと、ぺんだんとっ。」

と私の机の上をゆび指す。

そうだ。

私のペンダント。

お父さんに貰った、大事な大事な三角形のペンダント。

夏の大三角形をイメージしたという三角の銀のプレートに、真ん中より少し下、ちょうどはくちょう座のおしりのあたりに流れ星が彫つてある。

お父さんが知り合いの芸術家に頼んで作って貰ったものらしい。

お父さんは私が小学校に入学した年の夏、このペンダントを私にプレゼントしてくれた。

「これは幸乃のために作って貰ったんだ。この三角形はお父さんとお母さんと幸乃。真ん中の流れ星は幸太だよ。」

そう説明すると、私の首にそのネックレスをそつと掛けてくれた。だからこのペンダントは私にとって、唯一のお父さんの忘れ形見なのだ。

幸太の三角定規と、私のペンダント。

取りあえずその二つを目の前に並べて置いてみる。

この二つが押入れのすみで合わさった時。

よし、次のステップは押入れだ。

私と幸太は押入れを勢いよく開けた。

押入れのすみ、押入れのすみ…。

イメージでは上の右はじ？いや、左はじ？

ええい、全然わかんないから取りあえず右はじだ！

で、押入れのすみでどうすればいいの??

そこまで来て私は一気に勢いがなくなってしまった。
やっぱりわかんない。

二つの力を合わせるってどういうことなのかな。
うーん。うーん。

すると幸太が「おねえちゃん！みてみてー！」と私の横腹をべしべしと叩いた。

「ちよつと待つて、今考えてるから。」

と幸太の手を軽く払う私に、なおも幸太は「みてつてばあ！」としつこい。

「なに！」

と半ば怒り気味に見ると、幸太が三角定規とペンダントを組み合わせせていた。

三角定規の真ん中の三角の穴の部分。

その穴の中に、私のペンダントがほぼぴったりにはまっていた。

二つの力を合わせたときっていうのはこのこと？

ということは、これを押入れのすみに当ててみると何かわかるかも…。

私は三角定規の直角になっている部分を、押入れの角にはまるように当ててみる。

すると流れ星が右下に向かって流れ落ちた。

もしかしてこの流れ星が秘密を解くカギかもしれない！

そうひらめいた私は、流れ星をたどってみた。

しかし、流れ星の先は押入れのただの右壁で、何もあるようには思えなかった。

これは何か違う気がする。

そうか。

この流れ星がちゃんとそのままの向きで流れるように三角定規を置ける場所。

もしかするとそれが答えにつながるのかも…。

そして、その場所はこの押入れの中に二つしかない。

上段下側の右はじか、下段下側の右はじだ。

私は、まず上段の右端に当ててみた。

すると、ぴったりと当てはまった三角定規の真ん中の私のペンダントの中の流れ星が、うまく右上から右下へ流れるかっこうになった。

よし、これでどうだ！

どこに宝ものがあるの？

幸太も横で目をらんらんと輝かせている。

流れ星をじつと見ていた幸太が突然叫んだ。

びっくりした私も思わず「わっ！」と叫んだ。

幸太が流れ星の流れの軌道を、指で描いていった。

それは下段の布団の中に消えていった。

その下段にきれいに畳まれてしまわれている布団。

それは、お父さんの使っていた布団だった。

去年の大掃除の時、私とその布団を干そうと提案したがお母さんはこう言った。

「いいの。そのお布団はまだお役目を終えていないから。」

私は、お母さんがまだお父さんが死んでしまったことが悲しくて、干す気になれないんだと思っていた。

でもまさか。まさか…。

お母さんが言っていた『お役目』とは、このことだったの？

私と幸太は顔を見合わせると、えいっという掛け声と同時に布団の底に潜り込むようにして、布団の下を手でまさぐり始めた。

小さな幸太はもうほとんど布団の中に埋まってしまっている。

私も暑くて苦しくて、息が出来ない。

その中で、私と幸太は死にものぐるいで何かないか手をあちこちに伸ばして探しまくっている。

すると、私の手の先に布団でも床板でもない感触があった。

もしかして！

私はその何かをつかんで引つ張りだした。

それは、青い空色の封筒だった。

封筒には、

「幸乃へ」

そう書いてあった。

私は言葉を失った。

それは三角定規と同じ、お父さんの字だった。

お父さんが、私に手紙を…？これが宝物？

一体いつ書いたもの？

何を書いてあるの？

いいこと？それとも悲しいこと？

何でお母さんでも、幸太でもなく、この私に。

頭の中に色んなことが浮かんできて、喜んでいいのが良くわからなかった。

でも、なんでだか涙が出そうになった。

気がつくと、お母さんと幸太が横にいた。

幸太は「おねえちゃんにお手紙！なあに？よんでー！」と興味津津だ。

するとお母さんが幸太を諭すように言った。

「幸太。これは、おねえちゃんにあげるプレゼント。幸太はこの間あげたでしょう？だからこれはおねえちゃんにあげよ！」

私はゆつくりと顔をあげると、お母さんを見た。

その顔は普段テレビで恋愛ドラマを見てきやびきやびしたり、乙女チックな洋服を着て鏡の前に立ち「どう幸乃！かわいいかな？」とか言っているお母さんとは全然違った。

全てを分かっている、そして私を包み込むような優しい目をしていた。

きつとお母さんはこの手紙のこと、全部知っていたんだ。

でも私たちに一言も言わず、その時が来るのを待っていた。

ただ黙って。静かに。

その事實は、お母さんがちゃんと大人なんだってことに思えた。

だって私だったらそんな秘密、絶対黙ってなんていられない。

それも何年もなんて！

静かにただ見守るように優しい秘密を守り続けたお母さん。

それは、やっぱり私なんかにはまだ絶対出来ないことで、私はお母さんをすごいと思った。

いつもお母さんのこと、子供で、私の方がずっと大人なんだって思ってた。

そんな私の方がずつとずつと子供だった。

私は一体何を思いあがっていたんだろう。

お母さんが私の肩を抱いて、

「幸乃。それはお父さんとお母さんからのプレゼント。いつ読むかもどうするかも、幸乃の自由だからね。」

と言った。

私はもう胸が温かさでいっぱいになって、不覚にもまたうるうるしてしまった。

その後の夜ごはんの間中、私はまるで上の空だった。

幸太が色々話しかけてきたが、何と答えたのか全く覚えていない。

お風呂に入って、幸太が寝た後。

静かになった部屋で私は手紙を読むことにした。

お母さんはちゃぶ台で家計簿をつけている。

私は自分の勉強机の引出しを開けると、さっき大事に閉まった空色の封筒をそつと取り出した。

はさみで中の手紙を傷つけないように封筒の端をていねいに切ると、手紙を取り出した。

封筒とお揃いの、青い便箋が数枚出てきた。

私は少し緊張した。

ドキドキしながら折りたたまれた便箋を静かに開いた。

―― 幸乃へ

幸乃。おまえはもう何歳になっているのだろうか。
もう中学生かい？それともまだ小学生かい。

幸乃の成長をお母さんと一緒にずっとずっと見ていたかったけど、

どうやら無理そうです。

こんな弱いお父さんでごめん。

本当にごめん。

幸乃。おまえはしっかり者のお姉ちゃんだからこそ、お父さんは伝えておきたいことがたくさんあります。

だからお父さんは、おまえに三つの約束を残したいと思います。
守るか守らないかはおまえの自由だよ。

でも、読むくらいはしてほしい。

お父さんからのお願いだ。

ここで一枚目が終わっていた。

体調が良くない中一生懸命に書いたせいだろうか、文字がところどころ震えたように乱れていた。

お父さんがあの病室で、一人でこの手紙を書いている姿が目には浮かんできた。

私は切なくなつて、何かに耐えるように目をぎゅっと閉じた。

一呼吸して目を開くと、二枚目を読み始めた。

まずはその一。

しっかりしないこと。

その二。

家族を大事にすること。

その三。

自分を大事にすること。

他にもたくさんあるんだけど、この三つは守ってほしい。

おまえはお姉ちゃんだからって、しっかりしようとし過ぎてい
る。

でも、お父さんもお母さんも、おまえにしっかりしてほしいなん
て思っていないんだよ。親にとって子供はいつまでたっても子供
だ。おまえが大学生になっても、お嫁にいつてもだ。だから、い
つまでも甘えればいい。それはちつとも恥ずかしいことなんか
じゃ

ない。当り前のことなんだから。

おまえはそのうち、お母さんや幸太のことをうつとうしいとか、
放っておいてほしいとか思う時が来るだろう。もしかしたら、今
そうかもしれない。これも誰でも皆が通る当り前の道だ。だか
ら、

もしおまえがそう思ってしまったとしても自分を責める必要はな
い。だけど。お母さんがどれだけおまえのことを大事に大事に
思っ

ているかは、お父さんは本当に良く知っている。それに、幸太は
おまえのことを必要としているだろう。

だから、家族のことをうつとうしく思う日が来ても、絶対に傷つ
けるようなことはしないでほしい。言葉は言った本人も、言われ
相手にもトゲのように刺さって傷つけてしまうことがある。

だから幸乃。注意するんだよ。

おまえがもっともつと大人になったら、きっと大切な人が出来るだろう。お父さんはぜひともその人と会って見たかったけれど、出来なくなりそうなのでおまえを信じるしかない。

大切な人ができると、自分のことよりもその人のことを優先させてしまうことがあるかもしれない。

だけど、幸乃。けして自分を見失わないでほしい。

おまえが自分を大切にすることは、お前を大切に思うお母さんや幸太を大切にすることにもなるんだから。

最後に、幸乃。お願いがある。

お母さんと幸太に伝えてほしい。

パパはいつまでもずっと、みんなのことを見守っているからと。パパは大好きな空にみんなより一足先に探検しにいつて来るよ。

困ったとき、悲しいとき、うれしいとき、つらいとき、空を見てほしい。

お父さんはいつでも空からお前たちを見守っているから。

大好きだよ、お母さん。幸太。そして、幸乃。

いつまでも家族仲良く、幸せに。

それがお父さんの一生の願いです。

毎年天の川に願うのはそのことだけでした。

それでは幸乃。

また会う日まで。

最後の方はもう涙でほとんど読めなかった。

お父さんからの手紙。

ほんの紙切れ何枚なのに、ここに詰まっている優しさと厳しさ、そして愛はなんてたくさんなのだろう。

それに、お父さんのこの手紙の内容は、私がもう少しで失ってしまふところだった大事なものを思い出させてくれた。

本当に、何て素敵なタイミングでこの手紙は私のもとに届いたのだろう。

お父さんは本当に空から見守ってくれているんだ、私はそう思った。

後編（後書き）

企画締め切りの7日中に書ききれなかったために、エピソードをつけたいと思います。本当に申し訳ありません。ご迷惑をお掛け致します。

エピソード

今日は七夕。

七夕集会での司会もうまくいったし、体育では跳び箱八段飛べたし、今日はなかなかいい一日だった。

でも、七夕集会で司会をしている私に向かって幸太が、

「おねえちゃんだー！頑張ってえ！」

と叫んだのには参った。

私はあんまり恥ずかしくて、顔が真っ赤になってうつむいてしまった…。

「ゆっきー、七夕集会も無事に終わったし、今日帰りにうちに遊びに来ない？久しぶりにゲームやろうよ！」

そう話しかけてきたのはナオ。

すると、

「いいねいいね！じゃあ速攻で帰る準備して、ナオんち行こ！」

と飛び入り参加してきたのはノンちゃん。

私たちは仲良し三人組だ。

二人の誘いは魅力的だったし、盛り上がってるのに水を差すみたいで断りづらかったけれど、

「ごめん。今日は家で七夕集会第二弾があるんだ。お母さんも幸太もすごく楽しみにしちゃってるからさ、今日は家帰るね！」

と二人に手を合わせてゴメンのポーズをすると、まっすぐに家に向う。

そう、今日は我が家にとって一年に一回の大事な日。

七夕なのだ。

昨日の夜。

お父さんからの時を超えた手紙を読んだ私は、しばらく泣いた。

気持ち少し落ち着くと、ちゃぶ台で家計簿をつけていたお母さんに相談した。

相談とは、明日『風邪』で学校を休みたい、というものだった。

私は大人になろうと知らず知らずのうちに焦り、意地を張り、毎年欠かさずに行ってきた我が家の大事なイベントも今年は行かないと断っていた。

でも、お父さんからの手紙を読んで、自分のした決断を後悔したのだ。

だからお母さんに、やっぱり今年もみんなで天の川を見に行きたい、そう伝えたのだ。

私はお母さんは喜んで受け入れてくれると思っていた。

ところが、私の言葉を聞いたお母さんの答えは意外なものだった。

「ダメ。幸乃、風邪なんてひいてないでしょ。」

「え？だからそうじゃなくて、毎年そういうことにしてたでしょ？」

「でも今年はダメ。だって学校の集会で司会をするんでしょ？友達とも約束したんでしょ。だったら約束はちゃんと守らないと。」

私は言葉に詰まった。

お母さんの言うとおりだった。

黙ってうつむく私に、お母さんが優しく言った。

「幸乃。お母さんもね、いつまでもみんなで天の川を見に行くことは無理だと思ってたよ。それに、そのことにしられる必要はないの。これからは行けないことだってあると思うし、いつまでみんな

で行けるかもわからない。だから、行けないことに罪悪感を感じることはちつともないの。」

私はうつむいて涙をひざに落としながら、お母さんの言葉を聞いていた。

「みんなで天の川を見に行くことだけが大事なことでないんだよ。家族みんなの気持ちがつながっていることのほうが、ずっとずっと大事なことなんだから！」

お母さんはにっこりと笑うと、「何泣いてるの！」と私の肩を抱いた。

私は何も言わずにしばらくそのまま、お母さんに体を預けたまま泣いた。

私の肩に温かい何かがぼたりと落ちた。

見ると、お母さんも泣いていた。笑顔のままで。

「ただいま。」

カギでドアを開けて家に入ると、先に帰って来ていた幸太が奥からバタバタと走って来た。

「おねえちゃん、ママいるよー！」

「え？」

確か今日も帰宅は六時くらいの予定だったはずだけど。

そう不思議に思いながら部屋に上がると、お母さんは台所で早々とご飯の支度をしていた。

私は驚いて、

「お母さん、お仕事は？」

と聞くと、お母さんは振り向いてこう言った。

「今日は風邪引いちゃったからお休みしたの！」

相変わらずフリフリのエプロンをつけたお母さんは、ちらつと舌を出すとウィンクした。

ご飯の支度を手伝おうとすると、お母さんは今日はいいと断った。
「それより今日は夜ゆっくりしたいから、早く宿題やっちゃいなさいよ。」

幸太はまた押入れに出たり入ったりして何だか忙しそうだ。
いつもは私の邪魔ばかりしてくるのに、今日は一人で遊んでいる。
というわけで、苦手な算数の宿題に思う存分集中できる条件が整ってしまった私は、仕方なく宿題を始めることにした。

ちょうど私の集中力が切れるころ、お母さんが近くのコンビニで牛乳を買ってきてと、買い出しをお願いしてきた。
牛乳なんて明日でもいいじゃない。

そう思ったけれど、もう宿題にあきあきしていた私は快く引き受けた。

家から歩いて5分のコンビニに行き、一番安い牛乳を買った。

夏至も過ぎた初夏の風は、むっとするような湿気を含んでいた。

早く梅雨明けないかなあ、そう空を見上げると、どんよりとした曇り空が広がっていた。

あーあ。

今年は生れて初めて天の川が見られないんだなあ。
そう思うと、私は自分の早まった決断を今更ながらに後悔したのだ
った。

家に帰ると、なんだか様子が変わった。

お母さんと幸太がバタバタして、「早く！」とか「わあ！」とか騒
いでいる。

私が部屋に入ると、慌てた様子のお母さんと幸太が二人で並んで私
を見ている。

変なの、そう思いながら買ってきた牛乳を冷蔵庫に入れて部屋に戻
ると、やや落ち着きを取り戻した二人が私を手招きしていた。

「どうしたの？なんなの？」

「いいからいいから！ちよつとここに入ってみてよ。」

「おねえちゃん、おいしいね！」

お母さんと幸太が私に押入れに入るように言った。

何で？だいたい暑いし、お父さんの手紙はもう見つけたし…。

と、押入れに入る意味がわからない私は抵抗する。

でも、二人の必死な説得に負けて、仕方なく理由もわからないまま
押入れに入ることになった。

布団に跳ね返されそうになりながら何とかよじ登る。

ようやく上段の布団の上に登り、ふう、と落ち着いた私。

それを見たお母さんと幸太が、顔を見合せてニッと笑ったことに
は全く気が付かなかった。

突然、

「せーの！」

という掛け声がしたと思った瞬間、勢いよく押入れのドアがパシンと閉められた。

「えっ、何？何？！」

焦った私は慌てて開けようと、ガタガタと必死にドアに力を入れる。暗い所はあまり得意ではないのだ。

「なにをするの、開けてよ！お母さんっ。幸太！」

一体なんでこんなことを？

この間、幸太を泣かせた仕返し？

それとも天の川を見に行くのを断ったから？

だったらごめんなさいって謝ったのに！

こんな仕返しの仕方、あんまりじゃない！

真っ暗な押入れの中で、私はパニック状態だ。

頭の中は『何で？』と『ごめんなさい』のオンパレード。

すると押入れの外から、

「幸乃、ちよつと落ち着いてよ！」

とお母さんの声。

何言ってるの？こんな状況で落ち着けるわけがないじゃない！

お母さんの言葉になんだか怒りすら込み上げてくる。

早く開けてと叫び、なおもドアを開けようとする手に力を込める。

押入れのドアが外れそうにガタガタ鳴っている。

「幸乃、落ち着いて！天井見えてみて！天井！」

「はあ？！」

「おねえちゃん、お空見て〜！お空！」

「そら？てんじょう？」

二人の意味不明な言葉を聞いて、ドアを開けようとする手の力が少し抜けた。

天井？空？

私は真つ暗な押入れの中で、仰向けに転がるように横になると、上を見上げた。

私は息を飲んだ。

頭はすぐに真白になった。

さっきまでの騒ぎやパニックが嘘のように。

体からは力が抜けて、私は仰向けに横たわってぼんやりと天井を、いや、空に見入っていた。

真つ暗な夜空に天の川が横たわっている。

夏の大三角形もある。

それらは、今まで見てきた本物の夜空に比べると、何とも安っぽい光ではあった。

でも、今確かに私の目には、あの大好きな夏の夜空が広がっていた。家族みんなで見上げた、夏の夜空が。

静かになった私を心配してか、そうつと押入れのドアが開いた。

お母さんが私を見て、眉毛を下げて「あらあら」と笑う。

幸太を重そうに抱えあげると私の隣によいしょと座らせた。

私の顔を見た幸太は、

「おねえちゃん、また泣いてる〜！」

と困ったように叫んだので、私はせっかく星空に見入っていたのに

我に帰ってしまった。

狭い押入れの中に重なるように三人。

お母さんと幸太と私。

みんなで天の川を見上げていた。

幸太が必死に作った川村家の押入れの天の川。

この間、押入れの中で眠っている幸太を発見した時、幸太の周りにチューブのようなものが転がっていた。

あの時も、昨日の夜押入れの中の宝物探した時も、私はちっとも気が付かなかった。

幸太はお気に入りの光る塗料入りのチューブで、押入れの天井に一生懸命星空を作っていたのだ。

その光は蛍光がかっていて、今や吸収した光を使い切りそうになり、弱弱しくなっている。

本物の夜空にはほど遠い。

それでも、本当にきれいだ、と思った。

お母さんが、

「今年はおねえちゃんが天の川見に行かないって言ったから、幸太が考えてくれたんだよ。」

今年もみんなで見れたね。天の川！」

と嬉しそうに言う。

弱弱しくなった星を見上げていると、そこにお父さんの顔が浮かんできた。

大三角形のわし座のアルタイル。

お父さんがきらきらと光りながら、笑っているような気がした。

もしかすると、家族みんなで天の川を見に行くことは、お父さんに会いに行くことだったのかも知れない。

お父さんとお母さんの年に一度のデート。
私はそれを邪魔してしまったのだ。

「お母さん、ごめんね。」

私は心からそう思った。

お母さんは静かに笑って、

「ふふ。いいのよ。」

そう言って、私と幸太の頭を撫でた。

ほとんど光が見えなくなつた押入れの天井に、わし座のアルタイルとこと座のベガだけがまだ力強く輝いていた。

お母さんの顔は暗くてよく見えなかったけれど、きっと幸せそうな顔をしている。

そんな気がした。

「じゃあーん!!」

お母さんがちゃぶ台に本日の晩ごはんを披露した。

私と幸太は目を丸くして驚いた。

そこには、お弁当箱が四つ置かれていた。

「やっぱり七夕の夜は、みなでお弁当でしょ?」

につこりと、嬉しそうに笑うお母さん。

そう、毎年七夕の夜は、家族みんなで星空の下でお弁当を食べるのが我が家の決まりごとだった。

どんな豪華な料理よりも、そのお弁当は私の心を温かくした。

今年の七夕は、生まれて初めて本物の天の川を見に行かなかった。
それなのに、私は大切なものをたくさんたくさん見つけることが出来た。

でもそれは私一人では決して見つけることの出来ないもので、お母さんや幸太、そして、お父さん。

私の大事な家族が私にくれた大切な奇跡。

私はこの七夕を一生忘れることはないだろう。

川村家の笹には、今年はたった一枚の短冊がかかっていた。
でも大きい。

なんて言っただって、短冊を9枚つくった特大短冊だ。

お父さんに見えるように大きな短冊に大きな字で書いた、私たちの願いごと。

きっと本当の願いごとは、どんなに時が経っただって変わることはないのだ。

―― 家族みんなが いつまでも仲良くいられますように。

来年は会いに行くからね。

お父さん！！――

夜空で星が一つ、きらりと光った。

エピソード（後書き）

最後までお付き合い頂いた方、ありがとうございます。恋愛要素はほとんどないお話ですが、私なりに、家族のなかりを出来るだけロマンティックに書いたつもりです。いかがでしたでしょうか？宜しければ感想、ご指摘など頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6034e/>

天の川

2011年1月27日01時38分発行